教科書との対応（中学一年）

光村図書『国語1』p.170～174（今に生きる言葉――「矛盾」のほかに調べる故事成語の一つ）

次の【A】は、『史記』にある話を書き下し文にしたもの、【B】は、このあと項王が作った詩の初めの一句を訓読文で示したものである。読んで、あとの問いに答えなさい。（①～⑤は文の番号）

【A】①項王の軍、垓下に壁す。②兵少なく食尽く。③漢軍及び諸侯の兵、1之を囲むこと数重なり。④2夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰はく、3「漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや。」と。⑤項王則ち夜起きて、4帳中に飲む。

（注）項王＝項羽。楚の国の将軍で、漢の劉邦と天下を争っていた。垓下＝地名。壁す＝とりでにたてこもる。食＝食料。漢軍＝劉邦の軍。諸侯＝漢に味方した各地の王たち。数重＝いく重にも。楚歌＝楚の国の歌。乃ち＝そこで。帳中＝陣営の幕（テント）の中。

【B】力抜山兮気蓋世

（『史記』による）

問一 【A】の①～③から、このときの項王の軍は、どのような状況にあったことがわかるか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 兵も食料も十分で、漢軍を囲んでいた。
イ 兵も食料も足りず、いく重にも囲まれていた。
ウ 兵は少ないが、食料は十分にあった。
エ 漢軍と仲直りして、とりでを守っていた。

問二 1「之」は何を指しているか。【A】の中から四字で抜き出しなさい。

問三 2「夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き」は、白文では「夜聞漢軍四面皆楚歌」となる。返り点のつけ方として正しいものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夜聞漢軍四面皆楚歌
イ 夜聞漢軍四面皆楚歌
ウ 夜聞漢軍四面皆楚歌
エ 夜聞漢軍四面皆楚歌

問四 3の白文「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」の「乎」「也」は、書き下し文でどう書かれているか。ひらがな一字ずつで答えなさい。

乎 [　]

也 [　]

問五 ④で、項王が「大いに驚」いたのはなぜか。「楚の歌」「漢」という二つのことばを使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。

問六 3の「漢皆已に楚を得たるか」の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　漢は、もう楚をすっかり手に入れてしまったのか。
イ　漢は、まだ楚を手に入れていないのか。
ウ　漢の人々は、みな楚の歌を覚えたのか。
エ　楚は、もう漢をすっかり手に入れたのか。

問七 4「帳中に飲む」とあるが、夜中に起きて幕の中で酒を飲んだときの項王の気持ちとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　四方を囲まれ、もう勝つ見こみはないと感じて、悲しんでいる。
イ　楚の歌が聞こえてきたので、なつかしく楽しい気分になっている。
ウ　明日は必ず勝てると考えて、早めに祝っている。
エ　兵たちをはげますために、いっしょに宴会を開いている。

問八 【B】の訓読文を、書き下し文に直しなさい。

問九 【B】の中で、書き下し文に書かない字を一字抜き出しなさい。また、そのような字を何というか。漢字三字で書きなさい。

字
名前

問十 【B】の詩の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　わたしの力は山を引き抜くほど強く、気力は世の中をおおいつくすほどだった。
イ　山をこえる力も、世の中を変える気力も、わたしにはなかった。
ウ　山の上で力をためて、世の中を自分のものにしよう。
エ　力を合わせれば、山も世の中も動かすことができる。

問十一 故事成語「四面楚歌」の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　まわりが敵ばかりで、味方がいないこと。
イ　四方から、なつかしい歌が聞こえてくること。
ウ　みんなで声を合わせて、一つの歌をうたうこと。
エ　敵と味方が、仲よく歌い合うこと。

問十二 「四面楚歌」の使い方として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　学級会で一人だけ反対し、全員に反対されて四面楚歌になった。
イ　音楽会で、四面楚歌のすばらしい合唱を聞いた。
ウ　四人のなかまと四面楚歌して、練習にはげんだ。
エ　家族みんなに祝われて、四面楚歌の気分だった。

解答と解説

故事成語 標準④ 四面楚歌（史記）

内容の読み取り

問一 イ

【根拠】②「兵少なく食尽く」、③「漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり」。【読み方】状況を問われたら、①〜③の短い文を一つずつ現代語にする。②兵が少なく、食料はなくなった。③漢軍と諸侯の兵が、（項王の軍を）いく重にも囲んだ。とても不利な状況である。【まちがえやすい点】ア：囲んでいるのは漢軍のほうで、項王の軍は囲まれている。ウ：「食尽く」は食料がなくなったこと。エ：本文に仲直りの話はない。

問二 項王の軍

【根拠】①「項王の軍、垓下に壁す」、③「漢軍及び諸侯の兵、之を囲む」。【読み方】「之（これ）」は、前に出てきたものを指す。漢軍が囲んだ相手は、垓下にたてこもっている「項王の軍」。答えを「之」の所に入れて「項王の軍を囲むこと数重なり」と読み、意味が通るか確かめる。【まちがえやすい点】「垓下」とするまちがい。囲まれているのは場所というより、そこにいる項王の軍。また「項王」だけでは四字にならない。

問三 ア

【根拠】書き下し文「夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き」の読む順は「夜→漢→軍→四→面→皆→楚→歌→聞」。【読み方】「聞」は、聞いた内容（漢軍の四面皆楚歌する）を全部読んでから返る。「聞」と「歌」は二字以上はなれているので一・二点。「歌」に一点、「聞」に二点。【まちがえやすい点】イ：レ点だと「漢」を読んですぐ「聞」に返り、「漢を聞き」となってしまう。ウ：「楚」を読む前に「皆」に返る。エ：「夜」が「漢」のあとになる。

問四 乎　か　也　や

【根拠】書き下し文「漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや。」。【読み方】「乎」「也」のように文の終わりにつく字は、日本語の助詞・助動詞にあたるので、書き下し文ではひらがなにする。「乎」は疑問の「か」、「也」はここでは強いおどろきの「や」（「なんと〜ことか」）。同じ「也」でも、「矛盾」の話の「莫きなり」のように「なり」と読むこともある。【まちがえやすい点】「也」をいつも「なり」と覚えていると、ここでまちがえる。書き下し文の文の終わりの形を見て決める。

問五 （例）敵の漢軍の中から楚の歌が聞こえ、楚の人々までが漢に従ってしまったと思ったから。

【根拠】④「漢軍の四面皆楚歌するを聞き」、3「漢皆已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや。」。【読み方】驚いた理由は、直後の会話（3）に表れている。敵である漢軍の四方から、自分の国（楚）の歌が聞こえてきた。そこで項王は、楚の人々までが漢の味方になってしまったのか、と考えた。採点のポイント：①漢軍のまわりから楚の歌が聞こえた、②楚の人々も漢についた（楚が漢に取られた）と思った、③文末「から。」。【まちがえやすい点】「歌がうるさかったから」など、本文の会話を使わない理由はまちがい。

問六 ア

【根拠】3「漢皆已に楚を得たるか」。【読み方】一語ずつ訳す。「漢」（漢が）＋「皆（すっかり）」＋「已に（もう）」＋「楚を得たる（楚を手に入れた）」＋「か（〜のか）」。楚の人々が漢の陣営で歌っているのを、「楚の国がもう漢のものになったからだ」と考えた。【まちがえやすい点】エ：主語と目的語が逆。「楚を得」なので、手に入れたのは漢で、手に入れられたのが楚。イ：「已に」は「もう」で、「まだ」ではない。

問七 ア

【根拠】①〜④の状況（兵は少なく食料もない・いく重にも囲まれた・楚の人々まで漢についたと思った）、【B】の詩（このあと作った詩）。【読み方】行動から気持ちを考えるときは、その直前のできごとを手がかりにする。追いつめられて大いに驚いたあと、ねむれずに夜中に起きて酒を飲んだ。望みを失った、悲しい気持ちが読み取れる。【まちがえやすい点】イ：楚の歌は、項王にとっては「味方まで敵になった」というしらせで、楽しいものではない。ウ・エ：本文にない。

【A】の現代語訳】①項王の軍は、垓下でとりでにたてこもった。②兵は少なく、食料もなくなった。③漢軍と諸侯の兵が、項王の軍をいく重にも取り囲んだ。④夜、漢軍のまわりのどこからも、みな楚の国の歌が聞こえてくるのを聞いて、項王はそこでたいそう驚いて言うことには、「漢はもう楚をすっかり手に入れてしまったのか。なんと楚の人の多いことか。」と。⑤項王はそこで夜中に起きて、陣営の幕の中で酒を飲んだ。

問八 力は山を抜き気は世を蓋ふ

【根拠】【B】の返り点と送り仮名。【読み方】読む順は「力→山→抜→（兮は読まない）→気→世→蓋」。「抜」は一字下の「山」から、「蓋」は一字下の「世」から返る（レ点）。送り仮名「ハ・キ・ヲ・ハ・フ・ヲ」をひらがなにしてつける。「蓋ふ」は歴史的仮名遣いのまま書く（読みは「おおう」）。【まちがえやすい点】「兮」を書いてしまうまちがい（問九）。「蓋う」と現代仮名遣いに直すのもまちがい。

テストの形

問九 字　兮　名前　置き字

【根拠】【B】「力抜山兮気蓋世」の「兮」には送り仮名も返り点もなく、書き下し文「力は山を抜き気は世を蓋ふ」に出てこない。【読み方】「兮」は、詩の調子を整える字で、訓読では読まない。このような字を置き字という（ほかに「而」「於」「矣」など）。詩の句の真ん中にある「兮」は、句を前と後ろに区切る目印にもなる。【まちがえやすい点】「気」と答えるまちがい。「気」は送り仮名「ハ」がついて「気は」と読む。白文の字と書き下し文を一字ずつ照らし合わせ、書き下し文に出てこない字をさがす。

問十 ア

【根拠】【B】「力は山を抜き気は世を蓋ふ」。【読み方】「力は／山を抜き」「気は／世を蓋ふ」と二つに分けて訳す。「抜く」は引き抜く、「気」は気力・意気、「蓋ふ」はおおう。項王が、自分の強さと意気のさかんさを言い表している。これほど強かった自分が追いつめられた、というなげきにつながる。【まちがえやすい点】イ：打ち消しのことばはない。ウ・エ：これからの計画や、仲間と力を合わせる話ではない。

問十一 ア

【根拠】④漢軍の四面から楚の歌が聞こえ、項王は、楚の人々まで敵になったと思った。【読み方】故事成語の意味は、そのときの人物が置かれた状況から考える。四方（四面）を囲む敵の中から、味方のはずの楚の歌が聞こえた＝まわりがすべて敵で、助けてくれる者がいない、という状況。【まちがえやすい点】イ・ウ：「歌」という字から考えたまちがい。歌そのものではなく、「まわりがみな敵」という状況を表すことば。

問十二 ア

【根拠】「四面楚歌」＝まわりが敵ばかりで、味方がいないこと。【読み方】自分のまわりの人が全員、反対・敵の立場にいて、ひとりぼっちになっている場面で使う。アは、全員から反対されて味方がいない。【まちがえやすい点】イ・ウ：歌や仲間の意味ではない。エ：みんなに祝われるのは、味方に囲まれている場面で、意味が反対。

【テストに出るポイント】

・ひらがなにする字：「乎」→か、「也」→や（ここでは）、「之」→の（「楚人之多」）。置き字は「兮」。

・「四面楚歌」＝まわりが敵ばかりで、味方がいないこと。